

# 最重度・重度精神発達遅滞者の手続き能力とその変化

—精神発達遅滞施設における25年間の経過観察を基に—

長 峯 清 英

長野松代総合病院精神神経科

## A Study of Procedural Ability and Changes in Persons with Profound and Severe Mental Retardation —Based on 25 Years' Observation of the Course of Mentally Retarded Persons in a Facility—

Kiyohide NAGAMINE

Department of Psychiatry, Nagano Matsushiro General Hospital

A retrospective study on procedural ability acquired by residents in a facility for profound and severe mental retardation was conducted by dividing the subjects to a high-rank group and a low-rank group on the basis of behavior survey charts.

Withdrawal behavior, impulsive behavior, autistic behavior consisting of self-inflicted injuries and oral habits decreased among the residents in the high-rank group, and with respect to antisocial behavior, undirected excitement and attacks decreased, and object relations were acquired.

Age-related changes became marked beyond 50 years. The high-rank group had acquired motor ability and endurance, and even at 65 years their object relations were maintained with spontaneous participation in groups. The low-rank group had developed gait disorders and vision disorders, and motor ability and endurance were poor. When they reached 65 years, their capacity for interpersonal relations deteriorated, and group adjustment was poor. At an advanced age, many of the subjects in the vigorous high-rank group had self-centered personalities, while many of the subjects in the physically unfit low-rank group had dependent personalities.

This shows that the diagnosis of mental retardation requires evaluation of procedural acquisition capacity over many years and that intelligence scores should not be over-rated, as has tended to be the case. *Shinshu Med J* 47 : 21—31, 1999

(Received for publication September 2, 1998)

---

**Key words** : profound and severe mental retardation, adaptive behavior scale, object relationship, procedural ability, non verbal communication

最重度・重度精神発達遅滞, 適応行動尺度, 対象関係, 手続き能力, 非言語的交流

---

### I はじめに

最重度・重度精神発達遅滞者は言語能力が乏しい。感情表出手段も乏しいが、中には人の感情を受け止め

別冊請求先: 長峯 清英 〒381-1231  
長野市松代町松代183 長野松代総合病院精神神経科

る能力を持つ者もいて、非言語的な交流は訓練によって変化する可能性がある。従来の知能指数を重視した評価と違って、適応行動の概念に注目する動きがあり、その評価スケールの検討が行われている<sup>1)~4)</sup>。このような場合、適応行動に注目する評価によって得られる所見の多いことが期待される。

表1 療育手帳の判定基準

	一度（最重度）	二度（重度）
知能測定値	知能指数および、それに該当する指数がおおむね0～19の者	知能指数および、それに該当する指数がおおむね20～34の者
知能能力	文字、数の理解力の全くない者	文字、数の理解力の僅少ない者
職業能力	簡単な手伝いなどの作業も不可能な者、特に成人については、職業能力がない者	簡単な手伝いや使いは可能な者、特に成人については、庇護された環境のもとで、単純作業が可能な者
社会性	対人関係の理解の不能な者、特に成人については、社会生活の不能な者	集団的行動のほとんど不能な者、特に成人については、社会生活の困難な者
意思疎通	言語がほとんど不能な者	言語がやや可能な者
身体的健康	特別の治療、看護が必要な者	特別の保護を必要とする者
日常行動	日常行動に異常および特異な性癖があるため特別の保護指導が必要な者	日常生活に異常があり、常時注意と指導が必要な者
基本的生活	身辺生活の処理がほとんど不可能な者	身辺生活の処理が部分的にしか可能でない者

われわれは公立の施設で25年間にわたって、当園入所者に対し作業活動を通じて、集団参加の訓練を行ってきた。各園生は言葉はほとんど使えないものの、さまざまな個性を持っていて、作業を媒介としつつ手の動作能力を獲得していった。手の動作能力を獲得するに至るまでには園生と職員双方の努力があった。現在では体力の維持のみのグループと、疎通性を継続してある種の社会性を持つグループに分かれている。残念なことに公の事情から平成10年3月をもって施設の訓練科は廃止となったが、この機会に言葉を持たない人間が集団参加の手段として手の動作能力を獲得していく25年間にわたる経過をまとめた。

## II 対 象

研究対象は東京都八王子福祉園の入所者で昭和47年4月から平成9年4月まで25年間にわたって追跡調査のできた97名（男性：49名、女性：48名）である。なお、知能障害を中心とした障害の重さをみると、この97名はそれぞれに最重度（一度）が49名、重度（二度）が48名であった。（表1）

ところで、評価の基準にした適応行動尺度（Adaptive Behavior Scale）<sup>1)~3)</sup>とは、最重度・重度精神発達遅滞者が周りからの社会的要請に合致する行動をとれるか否かを測るものである。これを用いて、園生の手続き技能と習慣を測る第一部領域標準点（適応行動尺度（ABS）の第一部：主に自立能力、生活技能を評価する）を測り、平均5点以上の園生を上位グループ、平均が3点以下の園生を下位グループとし

た。平成9年4月の時点で上位グループに属するのは49名（男性26名、女性23名、平成9年における平均年齢＝45±7.2（標準偏差））、下位グループに属するのは48名（男性23名、女性25名、平成9年における平均年齢＝47±7.3（標準偏差））であった。

## III 方 法

### A 行動特徴について

平成9年4月の時点において、性格のゆがみと行動異常に関係した不適応行動を測定する適応行動尺度第二部領域標準点（上記ABSの第二部：問題行動を評価しており、低得点である程問題行動が多い）を基に観察された行動特徴を調べた。10点満点の標準点で2点以下の行動特徴で目立った行動（表2で\*印のついた行動）のうち、かんしゃく、対物・対人攻撃、反社会的行動、常同行動、特殊な姿勢、口に関する習慣、特殊な習慣、自傷、過動、異常な性的行動、情緒不安定、逃避行動に注目した。さらに積極的集団参加について、職員の誘導がなくても自発的に集団に参加できる園生数を調査した。なお数値上の変化は $\chi^2$ 検定によって有意差をみた。

### B 25年間の行動特徴変化について

平成9年4月時点で、50歳から65歳の上位グループと下位グループそれぞれに行動特徴について、入所時昭和47年からの変化を調べた。

### C 性格について

上位グループと下位グループの性格特徴<sup>4)~7)</sup>の差異およびその経年的変化を、入所時の昭和47年から平成

表2 適応行動尺度第二部領域の行動特徴

行動特徴	行動の例
暴力及び破壊的行動 * (かんしゃく) * (対物・対人攻撃)	1 おどしたり暴力を加えたりする 2 自分の物を故意にいためる 3 他人の物を故意にいためる 4 公共物を故意にいためる 5 気性が激しく、かんしゃくもちである
*反社会的行動	1 ひとをいじめたり、ひとのうわさをしゃべりまわる 2 ボスになってひとを動かす 3 ひとの活動を妨害する 4 他人に対する思いやりのない 5 ひとの物を大切にしない 6 汚いことばや敵意に満ちたことばを使う 7 許可なく、ひとの物を持ち出す 8 嘘をついたり、ごまかしたりする
反抗的行動 * (逃避行動)	1 きまりを無視する 2 指示や要請、命令に従うことを拒む 3 指導者に対して、生意気で反抗的な態度を示す 4 きめられたことに選れたり、さぼったりする 5 逃げ出したり、逃げようと試みたりする 6 集団の中で、良くない行いをする
自閉性	1 極度に自閉的で、全く動きがない 2 自閉的ではあるが、いくぶん動きがある 3 引っ込みがちで、恥ずかしがりである
*常同行動と風変わりな癖 * (特殊な姿勢)	1 常同行動がある 2 特殊な姿勢や風変わりな癖がある
異常な習慣 * (口に関する習慣) * (特殊な習慣)	1 癖がある 2 口に関する悪い習慣がある 3 自分の衣類をみだりに脱いだり、引き裂いたりする 4 異常な習慣や傾向がある
*自傷行為	1 自傷行為がある
*過動傾向	1 過動傾向がある
*異常な性的行動	1 適当でないところで自慰にふける 2 適当でないところで、体を露出する 3 同性愛的傾向がある 4 社会的に非難されるような異性愛的行動がある
心理的障害 * (情緒不安定)	1 自分の能力を過大評価する傾向がある 2 注意を素直にきかない 3 欲求不満を、うまく処理しない 4 過度の注目や賞賛を求め 5 被害意識が強い 6 心気症的傾向がある 7 その他の情緒不安定の徴候がある

9年4月にかけて分析した。

#### D 非言語的交流の変化

担当職員と園生との非言語的交流<sup>9)-10)</sup>に関しては、訓練活動の手続き<sup>11)</sup>を表現手段として育てる方法がとられた。言語以前の感情交流を育てるためには、身振り、表情だけでなく、リトミック、音楽を利用した遊びとダンス、園芸作業、手工芸、陶芸を表現媒体として週4回の訓練を続けた。その結果として、適応行動尺度 (ABS) の第一部領域において非言語的交流に変化がみられた身体的機能、仕事、自己志向性 (持続性、自発性など)、社会性につき、上位グループと下

位グループそれぞれの平成1年から平成9年に至るABS評価点の変化を調べた。

#### IV 結 果

施設開設当初は、職員との疎通性もとれない園生が多かったが、昭和58年から逃避行動が減り、集団行動にまとまりが出てきた。昭和63年が最も作業活動参加者が多く、その時期に疎通性を獲得した園生が多かった。年齢が50歳を過ぎると、体力の低下が著しくなり、足の動きが悪くなった。このような変化は、上位グループと下位グループで大きな差があった。本研究で検

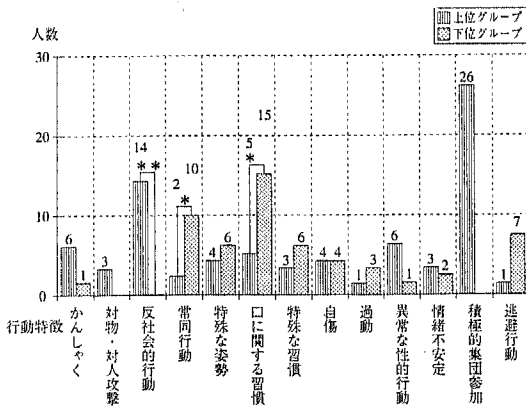


図1 平成9年4月における上位グループと下位グループ全年齢についての行動特徴  
\* $p < 0.05$  \*\* $p < 0.001$

討したそれぞれの項目について、観察結果を以下に記す。なお、次に述べるA以下の対象は、方法におけるA以下のそれに対応している。

A 行動特徴について (図1)

それぞれの行動特徴についてみると、反社会的行動を示す者 ( $p=0.0002$ ) は下位グループに比べて上位グループで有意に多かった。対物・対人攻撃、積極的集団参加は、上位グループだけにみられる行動特徴であった。かんしゃく、自傷、過動、特殊な習慣、異常な性的行動、情緒不安定、特殊な姿勢、逃避行動については、両グループ間で有意差はみられなかった。さらに口に関する習慣 ( $p=0.02$ )、常同行動 ( $p=0.03$ ) に関しては下位グループが上位グループに比べて有意に多かった。

B 25年間の行動特徴変化について (図2)

異常な性的行動、対物・対人攻撃、かんしゃく、過

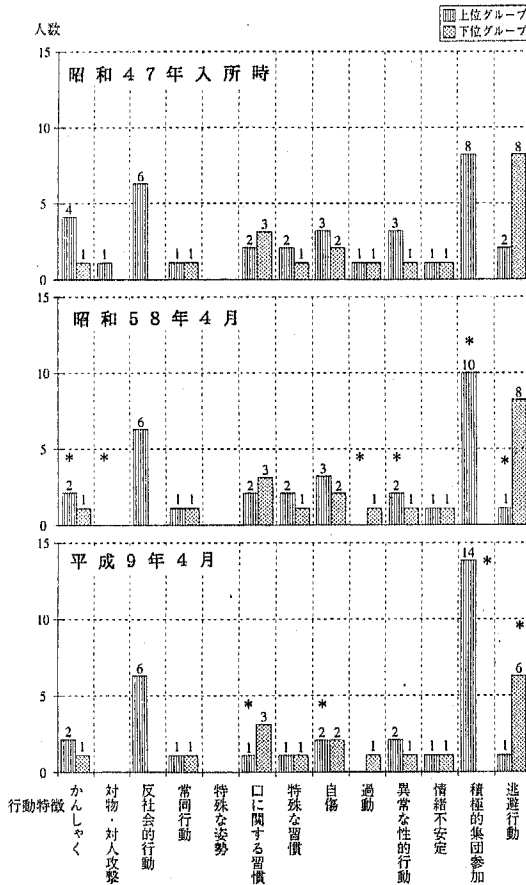


図2 昭和47年の入所時と昭和58年4月ならびに平成9年4月における行動特徴  
\*印は行動特徴が減少あるいは増加したことを示す。

表3 上位グループの行動特徴と性格、ならびに手続きと用具操作を獲得したもの

名前と年齢・判定	行動特徴と性格	手続き・用具の操作
T K50歳二度 てんかん合併	反社会的行動 攻撃的・強情	木槌・一輪車
T T51歳一度	口に関する習慣 わがまま・注意をひこうとする・自己中心的	木槌・一輪車
S K50歳二度	自傷行動 自己中心的・わがまま	一輪車
J M50歳二度	かんしゃく わがまま	ハサミ・絵筆
T S61歳一度	反社会的行動	スコップ・一輪車
N K58歳二度	常同行動 強情	一輪車
I K57歳一度	性的行動 注意をひこうとする	バケツ
S Y50歳一度	性的行動	粘土造形・二輪車
K Y57歳二度 てんかん合併	反社会的行動	一輪車・バケツ・スコップ
O Y63歳一度	反社会的行動 注意をひこうとする	二輪車
N T65歳二度 てんかん合併	反社会的行動	平織り(織物操作)
S M50歳二度 てんかん合併	情緒不安定 自己中心的	粘土造形・金槌
A Y63歳二度	かんしゃく・逃避行動 自己中心的	一輪車・絵筆
U K50歳二度	自傷行動 わがまま・自己中心的	バケツ
F C51歳二度	特異な習慣・くせ	ハサミ・絵筆
K T55歳二度 てんかん合併	反社会的行動 自己中心的	一輪車・編み棒

動などの対象を認知する衝動的行動特徴と逃避行動は、上位グループにおいて入所時から昭和58年にかけて減少していた。口に関する習慣、自傷は入所時から平成1年にかけて減少した。反社会的行動、常同行動、情緒不安定ではほとんど変化がみられなかった。

職員の観察によると、昭和58年以降、担当職員と視線を合わせることで、微笑み返しができるようになっていた。なお、同時期、自傷が減少した1名については、母親の態度が受容的になったことが変化の要因とされていた。

下位グループでは、自傷、口に関する習慣、常同行動についての変化がみられなかった。変化がみられたのは、職員の介助で集団活動に興味を持った2名の逃避行動の消失であった。反社会的行動は下位グループにみられず、職員と視線を合わせたり、微笑み返しもみられなかった。

C 性格について (表3, 4)

平成9年4月の時点で、上位グループでは自己中心的性格が多かった。下位グループでは依存的性格が多かった。

昭和47年からの変化は、上位グループでは衝動性と

表4 下位グループの行動特徴と性格、ならびに室内で遊ぶ様子

名前と年齢・判定	行動特徴と性格	室内での遊び
KK58歳一度	口に関する習慣・逃避行動 神経質	室内を歩き回る
MY65歳二度 てんかん合併	常同行動・逃避行動 温和	物差しで床を叩いて遊ぶ
WS50歳一度	自傷行為 依存的	音楽を聴いて声を出す
NM65歳一度	自傷行為・逃避行動 依存的	頭を壁にぶつけて遊ぶ
OM57歳一度	特異な習慣くせ・逃避行動 温和	床に寝そべて人にいたずらする
HM52歳二度	性的行動 依存的・人なつっこい	新聞紙を丸めて遊ぶ
AK65歳二度	過動 神経質	室内を走り回る・マラカスを振る
TM56歳一度 てんかん合併	情緒不安定・神経質	滑り台・トランポリンで遊ぶ
RS51歳一度	口に関する習慣 依存的	音楽を聴いて身体を揺る
WH51歳一度	かんしゃく・逃避行動 依存的・幼見的	タオルの糸を抜いて丸めて遊ぶ
KH57歳一度 てんかん合併	口に関する習慣・逃避行動 臆病・幼見的	室内を体を振って歩き回る

易刺激性が減少し、自己中心的性格(6名)、攻撃的(1名)、わがまま(4名)、注意をひこうとする(3名)、強情(2名)などの性格が持続していた。その中でも、入所時自己中心的性格で、常に周囲の人の注意をひこうとしていた園生1名は、担当職員の名前、あいさつ、自分の健康状態を手の動作と結びつけ、意思伝達手段として獲得した。その結果、注意をひこうとする意思が明確に伝わるようになり、日常生活が意欲的になった。

下位グループでは性格上の変化はほとんどみられず、依存的性格(5名)、臆病(1名)、神経質(3名)、温和(2名)、幼見的(2名)などの性格が持続していた。

D 非言語的交流の変化

1 自己志向性 (図3)

ABS一部領域の標準点について上位グループの平均が平成1年では5.2点、平成9年で5.3点、下位グループでは平成1年は2.9点、平成9年が2.6点であった。

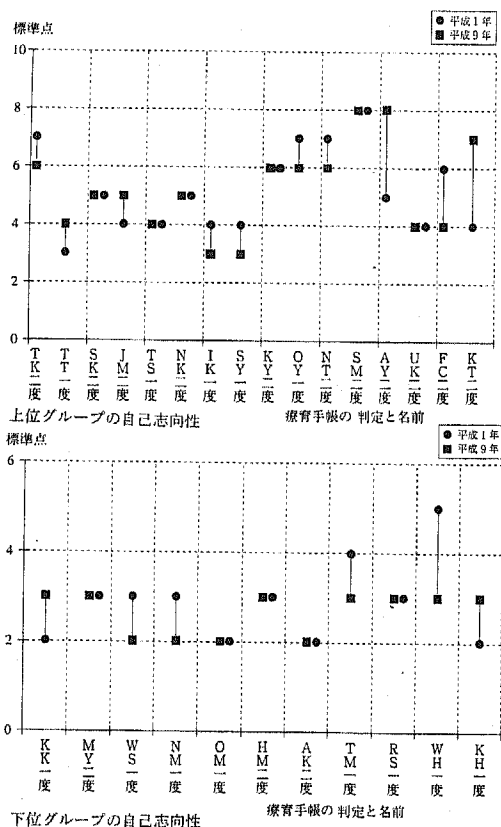


図3 自己志向性の変化

平成1年に比べると、平成9年4月の時点では持続力のある上位グループの園生は、手続きと作業課題の目的を理解できていた。そして職員の介助がなくても自主的に課題を楽しんでいた。持続性のない下位グループは、依存的で職員の介助を必要とした。

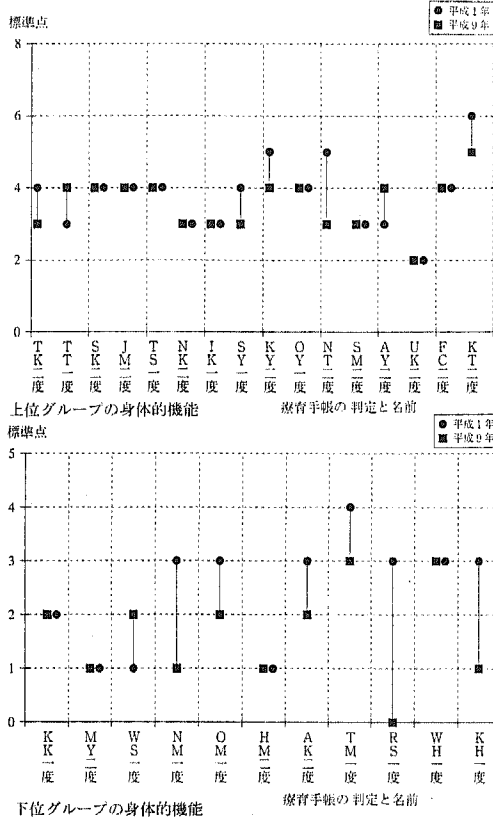


図4 身体的機能の変化

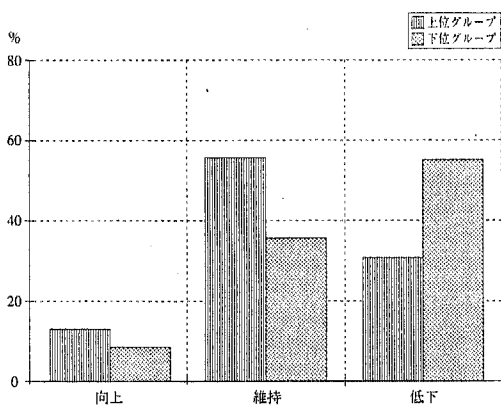


図5 身体的機能についての向上群・維持群・低下群の比率

2 身体的機能 (図4, 5)

ABS一部領域標準点の平均は上位グループで平成1年3.8点、平成9年が3.6点、下位グループで平成1年2.5点、平成9年が1.6点であった。

ABSの標準点の変化をみると、平成1年から平成9年にかけて、上位グループでは向上群が13%、維持群が56%、低下群が31%であった。下位グループでは向上群が9%、維持群が36%、低下群が55%であった。上位グループでは、職員との非言語的交流ができ、作業課題を通じて身体運動機能が保たれており、外界へ行動範囲が広がっていた。

下位グループは歩行障害(36%)と視力障害(36%)を持ち、じっとしていることが多く、自閉的で室内で遊ぶことが多かった。

3 仕事 (図6, 表3, 4)

ABS一部領域標準点の平均は上位グループで平成1年5.6点、平成9年が6.1点、下位グループでは平成1年3.6点、平成9年が3.6点であった。

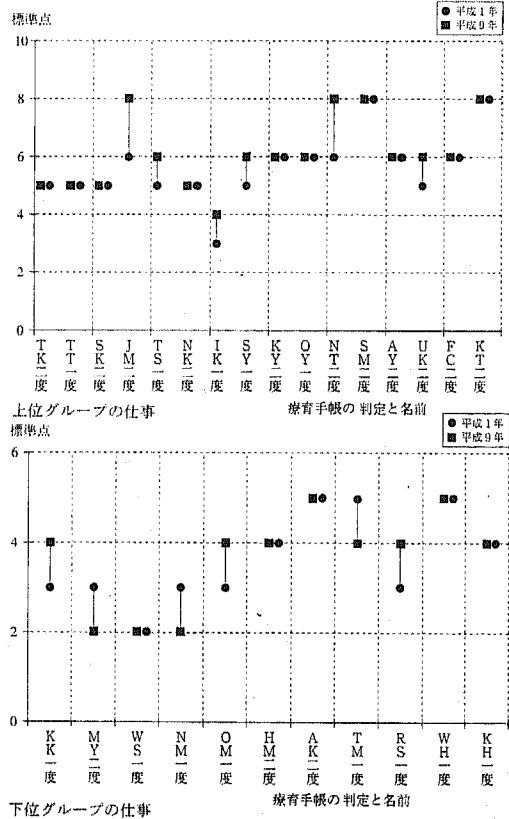


図6 仕事の変化

平成9年4月の時点では、上位グループは用具操作を学習すると、自分の好きな用具を選ぶことができ、その用具に名前があることを理解していた。訓練の時間になると、自発的に取り組み、用具の後片づけまでの一連の作業を行うことができた。木槌、一輪車、二輪車、絵筆、編み棒、織物機械操作の手続きが獲得できていた。声や身振りの要求手段が職員に理解できる時はよいが、理解できない時は反社会的行動、かんしゃくなどの問題行動がみられた。

下位グループでは職員の誘導で用具の操作を教えても、自分から自発的に操作する姿勢はみられなかった。作業の手続きを獲得できなかったが、滑り台、トランポリン、室内遊びなどはできた。

#### 4 社会性 (図7)

ABS一部領域標準点の平均は上位グループで平成1年4.8点、平成9年が5.3点、下位グループで平成1年3.0点、平成9年が2.8点であった。

平成9年4月の時点で、上位グループでは職員との

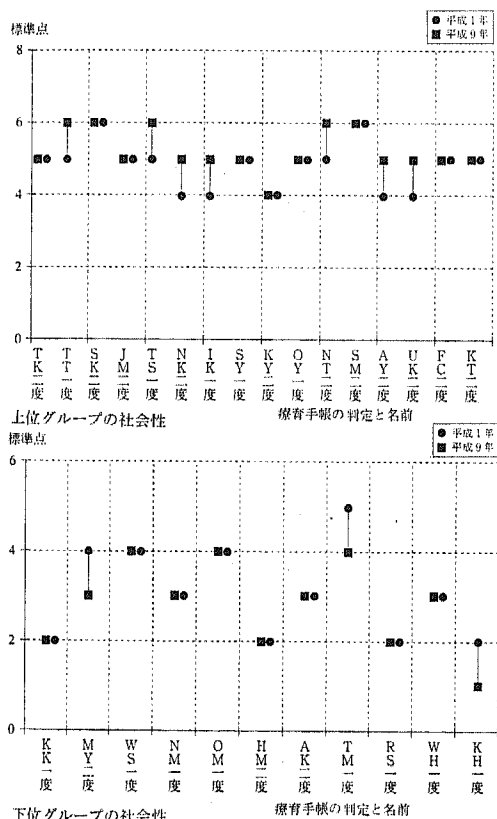


図7 社会性の変化

表5 知能指数と適応行動尺度の比較

	上位	下位	一度 (最重度)	二度 (重度)
自己志向性	25%	18%	23%	21%
身体的機能	13%	9%	15%	7%
仕事	38%	27%	46%	21%
社会性	* 44%	0%	23%	29%

\*p<0.05

やりとりが活発で、1年間に平均144回の集団参加が可能であった。入所時の無方向性の興奮・攻撃が、担当職員や同僚の対象に向けられるようになっていた。また好き・嫌いの感情が育っていて、対象には名前があるということを理解し、表情から感情を読みとる能力を獲得していた。少数の園生では嫉妬・思いやりの感情が観察された。

下位グループでは集団から逃避することが多く、1年間の集団参加回数は平均72回であった。対象に対する要求の感情をみせず、自閉的で自分の身体に関するこだわりが強かった。

#### E 知能指数 (Intelligence Quotient) による差異について (図3, 4, 6, 7, 表5)

日常生活能力に関する予後予測について、上記の結果からABS第一部の評価点が上がった園生の比率を知能指数(IQ)の段階に応じて検討した。知能指数により最重度群(一度)と重度群(二度)を比較すると、自己志向性に関しては平成1年4月から平成9年4月にかけて上昇した人数の全体数に対する比率(以下同様)は一度では23%、二度では21%であった。身体的機能では一度15%、二度7%、仕事では一度46%、二度21%、社会性では一度23%、二度29%で、知能指数(IQ)は予測妥当性に乏しかった。これに対して適応行動尺度(ABS)からみると、自己志向性では上位25%、下位18%、身体的機能では上位13%、下位9%、仕事では上位38%、下位27%、社会性では上位44%、下位0%で明らかな違いがみられた。 $\chi^2$ 検定では社会性について下位グループに比べ上位グループで有意に高かった( $P=0.03$ )。

したがって、知能指数に比べてABSの方が予後予測の妥当性が高いと言える。

### V 考察

#### A 行動特徴について

最重度・重度精神発達遅滞者の手続き能力については、早期に学習を積み重ねることによって、人間行動

の初期段階にある手の操作性を獲得することが重要と言われている<sup>12)</sup>。今回の観察では、ABSによる上位グループにおいては人の表情から感情を読みとることができるが、言語に乏しいため、手続き獲得が集団参加に有効であった。そのような集団では非言語的交流が成立していた。入所時20歳代であった上位グループの当園生でも手続き能力の獲得できる可能性が示された。しかし、全ての園生に能力があるわけではなく、性格、行動特徴によって能力が制限されていた<sup>13)</sup>。結果で示したように、上位グループの園生は対物・対人攻撃、かんしゃく、反社会的行動が多く、人とのやりとりが可能であったが、気分変動があり自分の要求を通そうとして、それが何らかの要因でうまくいかないと、反社会的行動やかんしゃくといった他人を巻き込む問題解決の方法をとりやすかった。しかし、反社会的行動、かんしゃくなどを行動特徴としてもつ園生は、かえって日常生活動作、集団生活について比較的よい理解力を示した。

50歳から65歳の上位グループでは、25年間の訓練活動を通じて、職員との疎通性がよく保たれ、職員の表情からその感情を感じとり、自発的集団参加ができるようになっていた。最重度・重度精神発達遅滞者の表情認識の社会適応訓練については、McAlpineら<sup>14)</sup>が喜び、悲しみ、怒り、恐れ、驚き、嫌悪の6つの感情を表情から読みとる訓練を行い、効果があると報告している。上位グループにおいては、対象と視線を合わせることや、微笑み返しができていた。McAlpineらの報告する6つの感情表出のみでなく、さらに相手に対する好き・嫌いの感情が育成されていて、好みの合う者同士の集団もできていた<sup>15)</sup>。数名の園生は集団でリーダーシップをとることや、他の園生に対する思いやりの感情がみられたことは注目される。

その場における相手の感情を敏感に感じ取るため、職員の対応としては反社会的行動やかんしゃくといった行動の改善のみを考えて、行動を抑制するばかりでなく、園生の理解していること、できることを認めて支えていくことが重要であった。対人関係でトラブルを起こしやすい人は、逆に集団参加において変化しうる人で、このような人に対しては問題行動のみにとらわれず担当職員が対社会にむけて対象関係が育成されるよう、受容的に接することが肝要と思われる<sup>16)</sup>。

下位グループについては、口に関する習慣、常同行動が多い。50歳から65歳の下位グループでは、自閉的な行動特徴が目立つようになった。そこで下位グルー

プの人に対しては上位グループに比べると体力維持に重点をおき、保護的に接した。

今回明らかになったように、50歳を過ぎると、老化によって歩行障害や視力障害が出現しやすい下位グループとその障害の比較的軽い上位グループに二分されるようになる。Mossら<sup>17)</sup>とMoss<sup>18)</sup>は50歳以上の最重度・重度精神発達遅滞の行動特徴についてABSを用いて評価し、高齢になっても反社会的行動がよくみられることは、社会的活動性が高く、環境に対する感受性に富んだ能力であると主張している。また常同行動について、常同行動を持つ自閉的な者は死亡率が高いが、高齢になっても元気である者に常同行動が少ないことから、50歳以上の高齢の最重度・重度精神発達遅滞者で外界に対する感受性を持つ者は、健康と機能を維持できる可能性があるとして述べている。

Mossら<sup>17)</sup>とMoss<sup>18)</sup>の研究は横断的な観察であるが、当施設において25年間の縦断的観察によると、上位グループでは反社会的行動に関し、無方向性に興奮、攻撃することが減り、興奮、攻撃の対象選択ができて、それが特定の職員、特定の園生、思いどおりに動けない自分に対する不満に限られてきた。そのため、余分な生命力を使わなくなったことが高齢になっても元気でいられる要因の一つだと思われる。これらのグループでは逃避行動もみられたが、作業への興味や目的を持つことと、手続き獲得により逃避行動が減少して持続性が出ていた。しかし観察した上位グループ49名、下位グループ48名に死亡者はなく、Mossら<sup>17)</sup>の述べるほど常同行動を持つ自閉的な者の死亡率は高くなかった。

下位グループでは職員の誘導による集団参加が多く、常同行動、自傷、口に関する習慣は25年間で変化がみられなかった。反社会的行動の緊張・落ち込み・不安・不眠・興奮・多弁などの気分状態に対しては、当施設の精神科医師が抗精神薬あるいは抗けいれん薬を定期的に調節することと、担当職員が園生の性格とその場の気分状態を把握して、逃避行動に対応したことによって作業へ方向づけることができた。

上位グループの園生は楽しんでいる時の表情が明らかで、集団の雰囲気や溶け込んでいるかどうかを容易に把握できた。25年を経ても楽しみの感情表出能力は衰えず、運動能力と持続力を維持できており、自傷に伴う逃避行動<sup>19)</sup>が減少し、外界への興味を持続できていた。

なお佐藤<sup>20)</sup>は最重度・重度精神発達遅滞の意思伝達



能改善の可能性を述べているが、実際に25年間集団訓練を続けて、疎通性が保たれていたという報告はこれまでにない。当園では施設の雰囲気や環境が園生に及ぼす影響を考慮しながら<sup>21)~23)</sup>、疎通性を育てるために職員と園生が1対1の割合で付き添い、気分変動を細かく観察して作業・課題の集団活動を週4回行った。

上位グループでは手続きと目的を理解するのに2年から3年を要し、作業に持続性が出てくるのに11年かかった。その後は職員の声がかけて自発的に自分の得意な用具を選択<sup>24)</sup>でき、用具に名前があることも理解し、作業が終わると後片づけまでできていた。しかし、反社会的行動は不眠をきっかけに激しくなったり、対象への要求手段が受け入れられない時、機嫌が悪い時に出現していた。グループ活動にまとまりが出てきたのも昭和58年からで、参加する回数が多い園生は職員とのやりとりが活発で、対象関係ができていた。

下位グループでは50歳を過ぎると下肢の運動能力に顕著な老化がみられ、対人関係においても能力の低下がみられた。自発性に乏しく、室内での自閉的な遊びが続いた。

## B 非言語的交流の変化

当園生の精神年齢は6ヵ月から2歳後半のレベルで、対象関係が成立する時期にあたる<sup>25)~27)</sup>。その頃は言語によるコミュニケーションは十分にできる段階ではないが、非言語的な情報を取り入れて表現している時期で、表出言語に比べて、言語理解は可能である。精神発達遅滞者の言語習得能力については、田中<sup>28)</sup>が述べているように、個々の発達レベルを正しく見極めて、それぞれに受け入れられるコミュニケーションの発達を促すことが必要と思われる。前言語的段階（本格的言語獲得に至らない段階）にある場合は、言語の発達は期待できないため、この段階では言語理解の発達を促すことに意を用い、自分の要求や感情表現を音声によってできるよう、個々のレベルに戻って受け入れることが必要で、感情のレベルに訴えて発声が誘発されるような雰囲気づくりが必要である。

当施設では訓練科の集団作業を通じて、園生の発声と表情・身振り・手振りから、その場の気分変動を職員が把握できて、疎通性がとれる雰囲気づくりが行われた。非言語的交流のできる園生は運動能力も発達していて、訓練で手続きを獲得し、感情表出の手段をもって対象関係を育てることができた。反社会的行動は2歳後半の発達過程でみられる反抗期の反対行動<sup>29)</sup>（自分の好きな園生をいじめる・人の使おうとしてい

る場所をわざと妨害する・指示されたことと逆のことをする）に類似して、受容的に接することにより対象関係と主体性が育つ行動であった。手続きを獲得できた園生は高齢になっても疎通性が保持できていた。

興味深いことに、上位グループの反社会的行動を持つ園生は高齢になっても集団参加に加わる意欲がみられたが、下位グループの依存的性格の園生は集団参加への意欲がなく、体力維持のみの生活になっていた。すなわち疎通性のとれる園生は暴れん坊で、不機嫌になると反社会的行動をとるため職員の手をやかせていた。このような園生は自己中心的性格を持っているが、むしろ上記のような反社会的とはいえ、活動性や疎通性が非言語的交流を社会性に結びつける基盤になったと思われる。

## C 適応行動尺度 (ABS) 第一部領域・第二部領域に関する変化

今回の研究結果によると、第一部領域 (ABS の第一部領域) の上位グループ園生は、第二部領域 (ABS の第二部領域) において反社会的行動が目立った。上記第二部領域の適応行動尺度による点数の低い反社会的行動の目立つ者は、経年的にみると適応能力が上がった。同時に今回の研究によると、高齢になっても適応能力のある園生は相変わらず第二部領域の反社会的行動の点数が低い (反社会的行動が目立つ)。逆に言うと、反社会的行動を示した者の方が高齢になってもなお元気で集団参加をしていた。すなわち、一般健常人の場合と異なり、これら最重度・重度精神発達遅滞者の場合は、反社会的傾向のある者の方が長期的にみるとかえって社会適応性が良くなることが判明した。

なお、手続き能力評価に用いた適応行動尺度は、Nihira ら<sup>30)</sup>と Nihira<sup>31)32)</sup>が米国精神薄弱学会 (American Association on Mental Deficiency) の適応行動についての概念規定を基に作成した内容を日本版にしたものである。適応行動尺度は二部構成になっていて、第一部では AAMD の原尺度を基にして日本での調査を考慮して改訂したもので、先に述べたように手続き能力や習慣<sup>33)34)</sup>がわかる。第二部は、日本での調査結果に基づき、性格のゆがみと不適応行動を測定するために作られたものである。われわれの結果 E にみられるように、IQ よりも ABS の方が日常生活能力に関する予後予測について信頼性の高いことが判明した。

## VI 結 語

- 1 昭和47年4月から平成9年4月に至る25年間の経過をみると、上位グループの園生では対象を認知した衝動的行動と、逃避行動、自閉的行動の自傷、口に関する習慣が減少していた。また、反社会的行動については無方向性の興奮・攻撃が減り、対象関係を育てることができていた。下位グループでは自傷、口に関する習慣、常同行動について変化がみられなかった。
- 2 反社会的行動傾向のある最重度・重度精神発達遅滞者の方が長期的にみると、かえって社会適応性が良くなっていた。
- 3 50歳を過ぎると加齢に伴う変化が顕著で、上位グループは運動能力と持続力があり、65歳になっても対象関係が保たれ、自発的に集団参加していた。しかし下位グループは歩行障害・視力障害が出現し、運動能力と持続力が低かった。

- 4 高齢になっても集団参加できる上位グループでは自己中心的な性格が多く、集団参加できない下位グループでは依存的性格が多かった。
- 5 最重度・重度精神遅滞者に関しては、従来のような知能指数(IQ)を重視した評価ではなく、適応行動尺度(ABS)による評価の方が予後予測性が高かった。すなわちABSのうちの「手続き」獲得の経年変化をみたところ、上位グループと下位グループでは顕著な差が出ていることがわかった。

本論文の要旨は第17回信州精神神経学会(日本精神神経学会支部会, 1998年10月17日)において発表した。稿を終えるにあたり、御指導いただきました信州大学医学部精神医学教室教授吉松和哉先生、東京都八王子福祉園医務科長平山雅清先生に深謝いたします。この研究は東京都八王子福祉園訓練指導科の御協力により行った。なお適応行動尺度の使用については日本文化科学社ので承を得ている。

## 文 献

- 1) 富安芳和, 村上英治, 松田 惺, 江見佳俊: 適応行動尺度—児童用・成人用共通, 第11版, pp 1-84, 日本文化科学社, 東京, 1996
- 2) 富安芳和: 精神薄弱者の適応行動の測定. 精神薄弱児研究 125: 30-37, 1969
- 3) 富安芳和: 適応行動測定の論理. 精神薄弱児研究 150: 56-60, 1971
- 4) 戸沢慶子, 中島 晋: 重症心身障害児のテストについて(3)—大島の分類におけるIQの問題. 重症心身障害研究会誌 14: 61-75, 1989
- 5) 深津時吉: 脳性麻痺の心理. 馬場一雄, 小林 登(編), 脳性麻痺, 小児科MOOK, 第7版, pp 219-229, 金原出版, 東京, 1979
- 6) 原 仁: 精神遅滞者のてんかんに関する調査研究. 波(社団法人日本てんかん協会) 14: 240-243, 1990
- 7) 設楽雅代: 精神遅滞と精神科的問題. 発達障害研究 15: 47-54, 1993
- 8) Harris SL: Teaching language to nonverbal children-with emphasis on problems of generalization. Psychol Bull 82: 565-580, 1975
- 9) 高橋彰彦: 精神医学大系. 懸田克躬(編), 精神発達遅滞. 行動・性格の異常, 第16巻A, 第1版, pp 263-290, 中山書店, 東京, 1979
- 10) 内須川洗: 言語病理学の現状. 臨床精神医学 6: 1227-1233, 1977
- 11) 小寺富子: 精神遅滞児のコミュニケーション支援. 発達障害研究 18: 21-31, 1996
- 12) 進 一應: 重症心身障害児の初期学習. 発達障害研究 16: 53-59, 1994
- 13) Foster R, Nihira K: Adaptive behavior as a measure of psychiatric impairment. Am J Ment Defic 74: 401-404, 1969
- 14) McAlpine C, Singh NN, Ellis CR, Kendall KA, Hampton C: Enhancing the ability of adults with mental retardation to recognize facial expressions of emotion. Behav Modif 16: 559-573, 1992
- 15) 宮本茂雄, 柚木 馥: 講座・障害児の発達と教育 7, 発達と指導 V, 情緒・社会性, 第2版, pp 9-271, 学苑社, 東京, 1984
- 16) Gaedt C: Psychotherapeutic approaches in the treatment of mental illness and behavioural disorders in

- mentally retarded people : the significance of a psychoanalytic perspective. *J Intellect Disabil Res* 39 : 233-239, 1995
- 17) Moss SC, Hogg J, Horne M : Demographic characteristics of a population of people with moderate, severe and profound intellectual disability (mental handicap) over 50 years of age : age structure, IQ and adaptive skills. *J Intellect Disabil Res* 36 : 387-401, 1992
  - 18) Moss SC : Age and functional abilities of people with a mental handicap : evidence from the Wessex mental handicap register. *J Ment Defic Res* 35 : 430-445, 1991
  - 19) Iwata BA, Pace GM, Kalsher MJ, Cowdery GE, Cataldo MF : Experimental analysis and extinction of self injurious escape behavior. *J Appl Behav Anal* 23 : 11-27, 1990
  - 20) 佐藤泰三 : 精神遅滞. *臨床精神医学* 26 : 591-596, 1997
  - 21) Shellhaas M : Motion pictures for stimulus presentation. Development and uses for opinion-attitude research interviews. *Psychol Rep* 22 : 689-692, 1968
  - 22) Shellhaas M, Nihira K : Factor analysis of reasons retardates are referred to an institution. *Am J Ment Defic* 74 : 171-179, 1969
  - 23) Shellhaas M, Nihira K : Factor analytic comparison of reasons retardates are institutionalized in two populations. *Am J Ment Defic* 74 : 626-632, 1970
  - 24) 三木安正, 旭出学園教育研究所, 日本心理適性研究所 : 新版 S-M 社会生活能力検査. pp 1-45, 日本文化科学社, 東京, 1980
  - 25) 菅 修, 妹尾 正 : 精神薄弱の変化のとりえ方—能力評価の方法, 第 1 版, pp 1-156, 日本児童福祉協会, 東京, 1973
  - 26) 田中教育研究所 : 田研・田中ビネー知能検査法, 第 6 版, 田研出版, 東京, 1977
  - 27) 津守 真, 稲毛教子 : 乳幼児精神発達診断法 0 才～3 才まで, 増補版第 2 刷, pp 9-55, 大日本図書, 東京, 1997
  - 28) 田中美郷 : コミュニケーション障害児の見方と指導, 第 1 版, pp 1-101, 安田生命社会事業団, 東京, 1992
  - 29) 田中昌人, 田中杉恵 : 子どもの発達と診断 3, 幼児期 I, 第 14 版, pp 126-210, 大月書店, 東京, 1997
  - 30) Nihira K, Foster R, Spencer L : Measurement of adaptive behavior. A descriptive system for mental retardates. *Am J Orthopsychiatry* 38 : 622-634, 1968
  - 31) Nihira K : Factorial dimensions of adaptive behavior in mentally retarded children and adolescents. *Am J Ment Defic* 74 : 130-141, 1969
  - 32) Nihira K : Factorial dimensions of adaptive behavior in adult retardates. *Am J Ment Defic* 73 : 868-878, 1969
  - 33) Leland H, Shellhaas M, Nihira K, Foster R : Adaptive behavior. A new dimension in the classification of the mentally retarded. *Ment Retard* 4 : 359-387, 1967

(10. 9. 2 受稿)